

AGNES GIEBEL
MASATOSHI SASAKI
JOINT RECITAL

.....beide singen mit großer Freude.....

アグネス・ギーベル
佐々木 正 利
ジョイント リサイタル

1990. 10. 1.(月) PM6:30開演 岩手県民会館中ホール

den 1. Oktober. '90. in Morioka

主催：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

後援：岩手県教育委員会・盛岡市教育委員会・NHK盛岡放送局・

岩手放送・テレビ岩手・エフエム岩手・岩手日報社・

岩手日独協会・グルッペ・ベッヒライン

ごあいさつ

盛岡バッハカンタータ・フェライン代表 小野寺 昌 勝

本日はお忙しいなかようこそおいで下さいました。

「地方にあっても、本格的な音楽芸術に触れる機会をもちたい」という趣旨のもと、私共バッハ・カンタータ・フェラインが日本国内外で御活躍中の音楽家をお招きして催してきました演奏会も、今回で5回目を迎えました。86年の「鈴木雅明チェンバロリサイタル」に始まり、87年「ムジカ・デラルテ・トウキョウ／バロック音楽の夕べ」、88年「今仲幸雄リサイタル」、同年「ミヒヤエル・ショツパー／バリトン・リサイタル」と、いずれの演奏会も多くの方々の御協力をいただき、また演奏家の先生方の本物の音楽に触れ、喜びと感動の時を過ごすことができました。

さて、今回の演奏会にはヨーロッパにとどまらず世界各国で積極的な演奏活動が続けられているメゾ・ソプラノ歌手アグネス・ギーベル女史、そしてここ盛岡を拠点として地元で根ざした音楽活動を続けると同時に自ら国際的な声楽家として御活躍の佐々木正利氏のお二人をお招きしております。一流のソロステージもさることながら、お二人のデュオステージを私自身、聴衆の一人として楽しみにしております。

最後に、このたび演奏会でピアニストをお願いした斎藤恵さんをはじめ、御後援、御協力をいただきました皆様に感謝いたしましてごあいさついたします。

《プロフィール》

アグネス・ギーベル (メゾ・ソプラノ) Agnes Giebel (Ms)

オランダに生まれる。オペラの舞台に立つことなくコンサート活動によってのみ国際的な名声を得た歌手としては、現代ではほとんど唯一のソプラノ。ラジオ録音、レコード録音においても優れた成果を収めてきた。全ヨーロッパはもとよりアメリカ合衆国や日本へも演奏旅行を行ない、その歌唱の安定感と表現法は深い感銘を与えた。

1986年、国際バッハ・アカデミー・シュトゥットガルト（H・リリング主宰）講師。

1988年、ドイツ連邦共和国・文化勲章第一等が授与される。

近年はメゾ・ソプラノ歌手として新しい道を開き、ヨーロッパ各地で盛んな演奏活動を行なっている。来日は、10数年前にバッハ・ゾリステン（ヴィンシャーマン主宰）と訪れて以来、二度目。

《プログラム》

Franz Schubert (F・シューベルト)

- 佐々木 正利 Die Forelle Op. 32 《鱒》
M・Sasaki Der Tod und das Mädchen Op. 7 No. 3 《死と乙女》
Lachen und Weinen Op. 59 No. 4 《笑いと涙》
Frühlingsglaube Op. 20 No. 2 《春の信仰》
- A・ギーベル Im Abendrot Nachlaß Lfg. 20 《夕映えに》
A・Giebel Litanei Nachlaß Lfg. 10 《連禱》
- 佐々木 正利 An die Musik Op. 88 No. 4 《音楽に寄す》
M・Sasaki An Silvia Op. 106 No. 4 《シルヴィアに》
- A・ギーベル Suleika Op. 14 《ズライカ》
A・Giebel Suleikas zweiter Gesang Op. 31 《ズライカ第2の歌》

【Pause】(休憩)

Johann Sebastian Bach (J・S・バッハ)

- 佐々木 正利 aus der Kantate Nr. 161 "Komm, du süßer Todesstunde" BWV 161
M・Sasaki Rez. Welt, deine Lust ist Last
Arie. Mein Verlangen, den Heiland zu umfassen
カンタータ第161番「来たれ、汝甘き死よ」より
朗唱 《世よ、汝の悦楽は苦なり》
詠唱 《我が望み、救い主を抱くことなり》
- A・ギーベル aus den Notenbuch für Anna Magdalena Bach BWV 82a
A・Giebel Rez. Ich habe genug
Arie. Schulummert ein
アンナ・マグダレーナ・バッハのための音楽手帳より
朗唱 《我、満ち足りり》
詠唱 《まどろみなさい、疲れし眼よ》
- 佐々木 正利 aus der Kantate Nr. 117 "Sei Lob und Ehr dem höchsten Gut"
M・Sasaki Arie. Was unser Gott geschaffen hat:
カンタータ第117番「至高の善に称賛と誉れあれ」より
詠唱 《我らが神の創られ給いしものは》

Alexander Zemlinsky (A・ツェムリンスキー)

- 佐々木 正利 Ehetanzlied Op. 10 No. 1 《めあとダンスの歌》
M・Sasaki Vöglein Schermut Op. 10 No. 3 《小鳥の愁い》
Kirchweih Op. 10 No. 6 《献堂式》

Robert Schumann (R・シューマン)

二重唱
Duette So wahr die Sonne scheint Op. 37 No. 12 《真に太陽は光輝き》

A・ギーベル Mondnacht Op. 39 No. 5 《月の夜》
A・Giebel Jemand Op. 25 《ある人》

二重唱
Duette Liebesgarten Op. 34 No. 1 《愛しの庭》

Johannes Brahms (J・ブラームス)

A・ギーベル Feldeinsamkeit Op. 86 No. 2 《野の静寂》
A・Giebel Komm bald Op. 97 No. 5 《すぐに来たれ》
Sonntag Op. 47 No. 3 《日曜日》

Anton Dvorák (A・ドヴォルザーク)

二重唱
Duette Fliege Vögelein Op. 32 No. 2 《飛べ、小鳥よ》
Der kleine Acker Op. 32 No. 5 《小さき畑》

《曲目解説》

ドイツ・リート of 歴史的変遷にみるシューベルト、シューマン、ブラームス、ツェムリンスキーの位置
佐々木 正 利

ポピュラーな意味合いでドイツ・リートの代表的作曲家を挙げるとすれば、真っ先にシューベルトの名が出てくることに異論をはさむ者はいないであろう。1814年、このシューベルト(Franz Schubert 1797-1828)の《糸を紡ぐグレートヒェン》で本格的にはじまったドイツ・リートの流れは、その後、4分の1世紀をもって完全にドイツ音楽の中に定着し、確実に重要な市民権を得ることになる。そもそもドイツ・リートのルーツを辿ると、中世のミンネゼンガーに端を発する民俗歌曲の愛着に、その発祥の因をみだし、幾世紀かを経て、この民謡的な叙事詩が、モーツァルト(Wolfgang Amadeus Mozart 1756-91)およびベートーヴェン(Ludwig van Beethoven 1770-1827)によって繰り広げられたピアノ音楽との結合によって、より確かな生命力を与えられたのである。この時代には、特に有節歌曲の生みの親ともいべきシュルツ(Johann Abraham Peter Schulz 1747-1800)やライヒャルト(Johann Friedrich Reichardt 1752-1824)といった隠れた重要な作曲家も活躍していたが、それらの流れの中から、〈歌曲王〉〈ロマン派叙情リート of 創始者〉と呼ばれるシューベルトが輩出されたのである。

他の知られたリート作曲家が、多くてもせいぜい200~300曲だったのに対し、シューベルトが600曲あまりの作品を残したこと、そしてその音楽の質の高さをも考えれば、こう呼ばれるのも当然のことといえよう。彼のリートの特徴は、正にそのロマン性にあるといえる。いかにもロマンティックな旋律、詩と音楽のたぐいまれな融合、これこそが彼のリートの生命であり、その美しさの根源である。彼は、ハイドン(Joseph Haydn 1732-1809)、モーツァルト、ベートーヴェンらに代表される18世紀後半-19世紀前半の、ウィーンでその全盛期を築き上げたウィーン古典派の音楽の形に基本的には従いながら、それに18世紀後半に大きな盛り上がりを見せたドイツの代表的詩人たちの叙情詩を独特の個性と天才的な才能で結合させ、歌曲という表現形態でしか実現できない様々な可能性を深く極め、それまで他のジャンルの作曲と対等に肩を並べることができなかったドイツ・リートというものをひとつの頂点に導いたことで、後世の作曲家の重要な道標となった。

そのシューベルトより13才若いシューマン（Robert Schumann 1810—56）は80曲足らずの可愛らしい小品を残したメンデルスゾーン（Felix Mendelssohn—Bartholdy 1809—47）を一応除外すると、シューベルトを直接継承するドイツ・リート（Lied）の担い手として、生涯中270曲ほどの作品を残している。先輩シューベルトが、歌曲分野以外の仕事を長年にわたって評価されなかったのに比べて、シューマンは特に作曲家としての最初の10年間はピアノ曲ばかり書いていたし、また自身ピアニストにならんとしていたことともかね合わせて、器楽作曲家としての名声を勝ち得ていた。このシューマンが、あまりにもよく知られたクララ・ヴィークとの結婚（1840年、いわゆる歌の年）を契機として急に歌曲に対して関心を向け始め、この年だけで実に136曲を作曲している。クララへの愛を表現するには、人の声というもっとも人間的な手段をとりたかったのだろうか。彼の音楽の特徴は、シューベルトのウィーン古典派の枠に縛られていた世界から大きく解放されて、熟れきったロマン主義の特徴である飛躍、激情、憧憬などに満ちた個性的なものである。そこでは、シューベルトにもまして文学に精通していた彼の言葉に対する読みの深さ、ピアノ曲の作曲スタイルの多くの要素を歌曲の分野に取り入れたことなどが裏づけの要素となっている。

さて、シューマンの弟子ではあるが、その直接の継承者というにはあまりにも作曲スタイルが異なるブラームス（Johannes Brahms 1833—97）が次に登場する。ブラームスは、やはりドイツ・リートの作曲家として後世に認められているヴォルフ（Hugo Wolf 1860—1903）、R・シュトラウス（Richard Strauss 1864—1949）が歌曲、交響詩、オペラなどのごく限られた分野の作品で著名であったのに対して、器楽曲、室内楽曲、交響曲、オラトリオを含めた合唱曲など各分野に均等に作品を残している点においては、師匠シューマンに通ずるものがある。しかし、シューマンの音楽にみられる頻繁なアゴーギクや病的なまでのロマン性を殊更排斥し、素朴で単純な有節形式を好んで用い（この点はシューベルトに似ている）、また一つの旋律動機を反復させることによる統一感や、その動機を変形させたものを対置させての古典的ともいえる構築感によって楽曲を形成しようとする意図がみえる。彼は、文学的教養もあり、詩の情感に敏感でもあったが、例えば、詩の音楽化は、第一に精神的、論理的な行為であり、詩の完全な把握、つまり詩の形式上の構造とその内在的な意味が彼にとっては基本的な問題だったのである。この点で、楽想の扱い方が、シューマンではいわば没我的、陶酔的であったのに対し、ブラームスでは冷静的、知性的であるということになる。

シューベルトとも比べられる多作の天才ドヴォルザーク（Antonin Dvorák 1841—1904）は、チェコ人であるため、本質的にはドイツ・リートの作曲家とはいえないが、宿屋と肉屋を営む父の命令でドイツ語を習わせられたこと（その営業にはドイツ語は不可欠であった）により、ドイツ語を意識した歌曲作品も数多く書いている。特に、オーストリア政府から与えられる〈若く、貧しくて才能ある芸術家〉への国家補助金を受けるにあたって提出した作品の数々が、審査員ブラームスにより高く評価され、その親交の中に多大なる影響を受けることとなった。

ブラームス以降のドイツ・リート作曲家の系図を辿るとき、我々はヴォルフ、マーラー（Gustav Mahler 1860—1911）、R・シュトラウス、プフィツナー（Hans Pfitzner 1869—1949）、ツェムリンスキー（Alexander Zemlinsky 1871—1942）、レーガー（Max Reger 1873—1916）といった大家の名に出会うことになる。彼等は、時には師弟関係にあり、また互いに影響し触発し合いながら個性的な作品を排出した。19世紀後半に生きた芸術家として、ロマン主義、ヴァーグナー主義、表現主義、印象派などと何らかの係わり合いをもっているが、共通していることは、あらゆる先例、類例から隔絶された孤高の位置を保持していることであろう。彼等の中で、さほど重要とは思われなかったツェムリンスキーが注目を浴び出したのは最近のことである。

ツェムリンスキーは、多大な影響を受けた先輩マーラーと同じように指揮者兼作曲家であったが、作曲家としてはマーラーと異なり、まず歌劇作家として評価されていた。さりとて歌曲の分野においても少なからずその才を発揮し、およそ120曲に及ぶ作品の数々は、時にはブラームス派に、時にはヴァーグナー派に、さてまたマーラー派に関心をもたれていた。即ち、生涯の作曲区分において度々作風が変化するのである。従って、その特徴を一言で論ずるにはかなりの無理が生ずるのであるが、敢えて総括すると、前衛的ともいえる新しい和声言語の探求、音楽上のユーゲント様式と呼べる装飾的なテクスチャーを特色としている。とはいっても、次に続くシェーンベルク（Arnold Schönberg 1874—1951）等の音楽とは違い、きわめて馴染みやすいロマンティズムを包括しているのである。

いずれにしても、ドイツ・リートの歴史と変遷は、言葉と音楽の融合なしには論じ得ず、この点でも源である

バッハ（Johann Sebastian Bach 1685—1750）から端を発した大きな流れが、現在、未来とどのように受け継がれていくのが、大いに注目されるところである。

《プロフィール》

佐々木 正 利 (テノール) Masatoshi Sasaki (Ten)

県立盛岡一高卒業。東京芸術大学声楽科卒業。同大学院修士課程及び博士後期課程終了。声楽を畑中良輔、須賀靖元、小林道夫、森明彦の各氏に、楽理を服部幸二、角倉一朗の各氏に、作曲を松本民之助に、宗教音楽を岳藤豪希氏に師事。芸大在学中より、バロックから現代に亘る宗教作品、特に J.S. バッハの声楽曲に深い造詣を示し、芸大メサイヤ公演、定期演奏会はじめ大学、一般合唱団と多数共演、特に1978年芸大マタイ受難曲公演にて、福音史家として高く評価され以後そのスペシャリストとして揺るぎない地位を得ている。

1979年シュトゥットガルトに渡り、ローレ・フィッシャー教授に師事。同年南ドイツにて数回歌曲リサイタルを開き好評を博す。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハ・コンクール声楽部門5位入賞。同年より1982年まで、デットモルト北西ドイツ音楽大学に学び、ヘルムート・クレッチマール教授に師事。この間同大学定期演奏会でドヴォルザーク、レクイエム・テノールソロを務めたのをはじめ、ドイツ、オーストリア、スイス、フランス、オランダ、ベルギー各地で一流オーケストラ、合唱団と多数共演。1980年ウィーン楽友協会ホールに於るマタイ受難曲においては「若き日のペーター・シュライヤー」と新聞各紙で絶賛される。1982年ハンブルグ、ブリュッセルの短調ミサでは特に高い評価を得た。帰国後もN響、読響、都響日フィル、新日フィル、東響の定期演奏会等に出演氏、K・マズア、H・シュタイン、H・プロムシュテット、H・ヴァインシャーマン、H・リリング、小沢征爾、秋山和慶の各氏等と共演。1985年ザルツブルグ音楽祭に招かれ、R・バーダー指揮のベルリン聖ヘドヴィヒ聖歌隊、ザルツブルグ・モーツァルテウム管弦楽団とバッハ・マニフィカト、モーツァルト戴冠ミサを共演、好評を博す。滞独中オペラでは、コシ・ファシ・トゥッテ・フェランド、フィデリオ・ヤッキーン、スカララッティ・グリセルダ・コッラード等で出演、現在までリサイタル10回、NHK-FMリサイタル5回等歌曲の分野でも活躍。長年に亘り、小林道夫氏のもと東京芸大バッハ・カンタータ・クラブの指揮者を務め、後進の指導にあたる。1987、88年にはH・リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにて、テノール・マスタークラスの講師を務める。

現在、岩手大学教育学部音楽科助教授。二期会会員。グルッペ・ベッヒライン会員。仙台バッハ・アカデミー理事。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岩手大学合唱団、東北大学混声合唱団各常任指揮者。岡山バッハ・カンタータ協会指揮者。水戸バッハ・コレギウム音楽顧問。

斎 藤 恵 (ピアノ) Megumi Saito (Begleiterin)

県立盛岡二高卒業。国立音楽大学器楽学科ピアノ専攻卒。

瀬川慶子、野呂愛子、大石潤、L・クレッチマールの各氏に師事。

岩手県ピアノ音楽研究会会員、グループえび会員、グルッペ・ベッヒライン会員、盛岡大学非常勤講師。

1991年3月10日(日) 岩手県民会館大ホール

独唱：今仲幸雄、佐々木正利 他

オーケストラ：東京バツハ・カンタータ・アンサンブル

合唱：盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

盛岡バッハ・カンタータ・フェラインは、主としてバッハの教会カンタータを演奏する目的として結成され、今年で13年目を迎えます。これまで、バッハの教会カンタータ、オラトリオ、受難曲を中心に、古今東西の宗教音楽の名作に取り組み、多数演奏会を開催、西ドイツへの演奏旅行も行いました。今年の年末には第2回目の西ドイツ演奏旅行を行う予定です。

只今、会員を募集しております。合唱経験の有無、個々のレベルは問いません。合唱が好き、音楽が好き、という方、大歓迎！ 外国語は自信がないという方もどうぞご安心、一から皆で勉強していきます。皆さん、私たちと一緒に歌いませんか。バッハの音楽は決してかた苦しいものではなく、人間味にあふれ、時を越えて私たちの心に語りかけてきます。

どうぞお気軽に練習会場においで下さい。

- 練習日 毎週火曜日PM6:30~9:00
- 会場 カトリック志家教会礼拝堂
- 練習曲目 H. シュッツ：マニフィカト
D. ブクステフーデ：マニフィカト
J. S. バッハ：モテット第1番、第2番

他今回のプログラム

- 連絡先 小原一穂 TEL 23-7146
新沼理恵 TEL 25-3077